

EQ 特性対応の経過

1) 1980年代から2000年代

RIAA以外のEQカーブのことを知らずに試行錯誤し、鳴らしやすいレーベルとならしにくいレーベルがあることを認識していました。

鳴らしやすいレーベル：PHILIPS 日本盤 ERATO

harmonia mundiの一部

鳴らしにくいレーベル：ドイツグラモフォン CBS Sony Angel

また、1960年代購入盤と1980年代購入リマスター盤の音の違いも認識し、来日演奏家の演奏会とアナログ再生のオーディオの印象のギャップに驚くこともあり、オーディオへの不信感も抱いていました。

いくらかでもこのような印象を解消すべく、当時使用していた、Luxのプリアンプでは、レーベル毎にトーンコントロールを調整したり、JBL4350Aの場合は、レーベル毎にチャンネルデバイダーF-15のレベル調整（クロスオーバー：250Hzと12.5KHzの3チャンネル）をしたりしました。

部屋の特性補正が目的で、グラフィックイコライザーのテクニクスSH-8075を使用していましたが、レーベル毎の補正にも使用しました。テクニクスSH-8000の発振器と音圧測定器で部屋の特性補正をフラットした上で、なおかつ意味も分からず、グラフィックイコライザーを触っていました。その後、音質劣化が気になって250Hz以下に限定適用に変更し、現在は故障で使用を休止しています。

2) iFiのiPhono導入 2010年代

DECCA、Colombia、RIAAのカーブが選択できるということで、iFiのiPhono導入し、それらの選択を実施しましたが、欧州盤では、DECCAカーブでも、なおかつ十分と言えないレーベルもあり、e-RIAA (enhanced RIAA)も対応できるはずですが、どのようなレーベルに適用できるかが分かりませんでした。

しかしながら、これを契機にイコライザーカーブの情報を集めだしました。

3) ZANDEN フォノイコライザーとの遭遇 2019年10月

大きな転機となったのは、九州のオーディオショップ吉田苑が大阪に出てきて試聴会をやり、それに参加したことです。

[吉田苑大阪オフ会報告 \(2019.10.20\)](#)

ここで、ZANDENのデモを聴き、バッハのチェンバロ協奏曲でTELDECカーブと位相反転のデモがあり、TELDECカーブというものを始めて知り、同じ盤の自宅での再生との相違を認識しました。

4) ZANDEN フォノイコライザーの試聴と導入 2019年6月

その後日本橋のシマムセンに ZANDEN 製品の展示があることを知り、盤を携えて計 4 回にわたり試聴させてもらいました。

[シマムセン ZANDEN フォノイコライザー試聴報告 \(2020.6.9\)](#)

この過程で同価格帯のアキュフェーズ、フェーズメーションとも比較し、EQ 特性の調整効果の有益性を確認し、ZANDEN 社ともやりとりがあって導入を決定しました。

[ZANDEN Model 120 の導入\(1\)](#)

導入以降、延べ 500 枚弱の盤について EQ 特性の判定を行ってきましたが、当初はなれない判定に苦しみましたが、システムの改善ごとに判定が容易になり、鳴らしにくい盤が解消し、JBL4350A でのチャンネルデバイダーのレベル調整も固定化しました。

5) EQ 特性に関するオーディオ界の現状

オーディオジャーナリズムは、この問題に関して正面から取り上げておらず、参考になる情報はあまりありません。他方、オーディオメーカーは、それぞれ独自の路線をとっており、標準仕様といったものはありません。ZANDEN のフォノイコライザーの仕様は、ヨーロッパでは高い評価を受けていますが、日本では顧みられていません。レーベル毎、カッティング毎、国毎、年代毎などの EQ 特性の情報はほとんどないと言っていると思います。

現在知る限りの EQ 特性について整理した情報をオーディオ論壇のページに掲載しています。

[EQ カーブ規格・位相・第 4 時定数](#)

[Old EQ 特性](#)

以上